

チエチーリア・バルトリ

取材・文 中東生
Text Shinjou Nakai

ナポリがその昔、カストラートのメッカだったことはあまり知られていない。全盛期には毎年イタリア全土で約4千人が去勢手術を受け、そのうち3千人以上はナポリの出だつたという。芸術という名のもとに人間としての一生を捧げさせられた彼らを、チエチーリア・バルトリが「神への捧げもの」と題したCDを通して現代に蘇らせた。

ナポリ郊外のカゼルタという、モツツアレツラチーズで有名な街には、ブルボン朝時代の広大な王宮がある。9月12日の夕暮れ時、大型バスが3台も乗り付け、メキシコ大使アメリカ領事、チューリヒ歌劇場支配人などヨーロッパからのゲストが次々に吸い込まれていった。ナポリのサン・カルロ歌劇場に做って作られたという内部の小劇場に移動すると、17世紀にタイムスリップしたような錯覚を起こさせる。アントニーニ率いるイル・ジャルディーノ・アルモニコは叙情的に、ドラマティックに序曲を奏で、当時これらの音楽が、いかに官能的に響いたかを想像させてくれた。続いて登場した男装のバルトリは、彼女の超絶技巧に慣れた聴衆でも息を飲むようなコラトゥーラの数々を操りながら、カストラートの芸術を再現しきった。ピアノツシモで嘆くバルトリは、男性的でいて柔らかな、それが独特の哀愁を帯び、男性の色気すら感じさせたのには圧倒された。

最後の2曲は上部が金色のドレス風、下は

新しい発見はいつも私を魅了します。美と残酷さが入り交じったカストラートの世界を忠実に伝えたいと決意したので



アルバム「神へのささげもの〜カストラートのためのアリア集」はボルボラ、カルターラほかによるカストラートのための作品を収録し、ユニバーサル・ミュージックより発売中(UCCD-9764/5, UCCD-1251)

男装の黒いスリムパンツのままの衣装が両性の融合を表しているのだろう。アンコールは背中部分に赤い羽を襟のように入れて歌い、それを抜き捨てながら、舞台を後にした時、バルトリにしては生真面目過ぎるように思われたコンサートが、いつものように茶目つ気を帯び、喝采のうちに幕が下りた。

美しい音楽だけを堪能したいと思つたこともあつたけれど、彼らの犠牲がなければ、こんなに美しいレパートリーは生まれなかつたかもしれない

コンサートから一夜明けたバルトリは、ひっそりなしに続く各国のインタヴューアにも疲れを見せず、遠くから手を振って迎えてくれ、インタヴューに応じてくれた。

カストラートというテーマについて。バルトリ(以下、B) 私はイタリア女特有の体つきだから(笑)。あまり男役は歌わないけれど、カストラートについてはずっと興味があつたの。ナポリの学校から派生した真の偉大な歌手達のために書かれた音楽を形にすることは、数年来の目標でした。このCDのうちの何曲かは、もう何年も前から温めていたものだけれど、他の曲もたくさん揃つた

今、録音に踏みきり、こうして形に残つたことにとでも満足しています。ナポリの図書館に通つたりして彼らの事を調べていくうちに、1年に3、4千人ものカストラートが輩出される中、キャリアを積めるのは1、2人という悲劇を目の当たりにし、目を背けたくもありません。美しい音楽だけを堪能したいと思つたこともあつたけれど、彼らの犠牲がなければ、こんなに美しいレパートリーは生まれなかつたかもしれないと気づいて、美と残酷が入り交じつたカストラートの世界を忠実に伝えたいと決意したので。

現代において認知度の低いものをテーマにCDを作つてこられたようですが……

B 私は何か言いたいことがある時にだけCDを作ります。新しいことの発見はいつも私を魅了します。毎回、曲の勉強の他に、音楽学的な調査も必要となつてきます。今回のテーマも奥が深く、音楽学者であるマネージャーと共に調べたカストラートの歴史の全てが、100ページにわたるブックレットに集約されています。この音楽をよりよく理解するのに役立つでしょう。「禁じられたオペラ」のCDを作っていた頃から今回の構想は練っていました。ここではオラトリオという形で表現されていたものを、今回はバロック音

楽の真骨頂としてのオペラ・アリアで歌うことができたのですから、集大成と言えます。ナポリについて。

B ナポリにはカストラートの大きな学校がいくつもあつて、その中の最も有名なものがボルボラです。彼は英国におけるヘンデルの存在すら脅かしたほどのよ。ボルボラは作曲家としてだけでなく、教育者としても卓越していたので、多くの優秀な弟子たちを抱え、彼らのために、難易度の高い素晴らしい曲をたくさん作り、常に大きな成功を手に入れたのにもかかわらず、現在はまだ知られていません。そんな歴史のあるナポリで、是非、このCDのお披露目コンサートをしたかつたけれど、サン・カルロ劇場は火災後の修復で、ロマン派の傾向に立て直されてしまつていて、私はどうしても、バロック独特の劇場が欲しかった。そこでカゼルナの王宮を会場に選んだの。

今後の活動について。

B このコンサート・ツアーに加え、来年は演奏会形式での《ノルマ》デビューが決まっています。又、来年はマラーのメモリアルイヤーということで、また計画にはありませんが、もしかしたら何かできるかもしれませんね。前回日本に行けなかつた事は今でも残念で仕方ないので、いつかまた、日本の皆さんの前で歌えるチャンスが訪れるのを心から願っています。出発予定日の直前までスタンバイしていましたが、確約がないのに行くには少々遠過ぎます。日本の聴衆は注意深く音楽を聴き、礼儀正しく、繊細な感受性を持っていて、一緒にコンサートを創り上げてくれるのです。ライブ演奏は決して一方通行ではないのです。そして、日本のホールの素晴らしさが相まって、飛行機の旅が苦手な私でも、どうしても行かずにはいられない国なのです。